

教室でほんもの!?!のアートをみる方法

~美術コレクションを活用した出張型展示鑑賞授業~

「enoco コレクション・キャラバン」記録集2016-2021

発行年:2022年3月1日発行

企画・執筆: 高坂 玲子、高橋 真理子、吉原 和音(enoco)

編集: 吉原 和音(enoco)、野澤 美希

デザイン: 小池 一馬(Kazuma Koike Art&Design)

写真: enoco提供(クレジット表記のないもの)

発行:

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]

(指定管理者:長谷エコミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループ)

この冊子(印刷版・PDF版)を無断にて転載することを禁じます。

インターネットからPDFファイルを2027年3月までダウンロードできます。

www.enokojima-art.jp



-大阪府20世紀美術コレクションの貸出を行っています-

美術館や文化施設の他、公共施設や病院、大学、ホテル、民間企業のエントランス等での展示を通じて、より多くの方に大阪府所蔵の美術作品に親しんでいただけるよう、コレクションの貸出を行っています。教育や人材育成の場において、実物の作品を用いた鑑賞プログラムにもご活用いただけます。詳細はenocoまでご相談ください。

※レンタル料は無料です(梱包作業費、運送費、保険料などの実費は借主負担。またコーディネートや対話型鑑賞等の出張が必要な場合は、別途企画人件費がかかります。)



もくじ

03 はじめに

04 キャラバンのつくりかた 事前準備編／当日編

コラム 「鑑賞作品との付き合いはじめ」ナビゲイターとして鑑賞会の前に取り組むこと

コラム 作品をみるための「3つのコツ」

コラム 展示+鑑賞+α 組み合わせると、もっとみたくなる?!

コラム 「3つの作品を鑑賞する」ことで、子どもたちに伴走する

10 用意するもの 《対面の場合／オンラインの場合》

コラム 「作品を触ってはいけません」

12 作品の紹介

コラム 「対話型鑑賞に適した作品」ってなんだろう？

14 これまでのキャラバン、他の事業や活動への展開

15 あとがき

はじめに

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco](以下、enoco)は、およそ7900点におよぶ大阪府所蔵の美術作品「大阪府20世紀美術コレクション」の管理・活用を担い、コレクションの魅力を多くの方に知っていただくため、企画展の開催、美術館や公共空間といった外部への貸出などの事業を行っています。

enocoはコレクションの管理・活用を担っていますが、コレクションそのものは府民の財産です。そこで、その財産を様々な人々に向けてひらくこと、多様な出会いの機会をつくることを目指して、2016年度より出張型の展示事業「enoco コレクション・キャラバン」(以下、キャラバン)を実施しています。大阪府内の小・中・高校、支援学校に出張し、教室などに作品を持ち込み、展示し、子どもたちと共に作品を鑑賞します。

enocoは府立の施設とはいえ、大阪市内中心部に位置しています。県境近くのまちに住む人々にとっては遠い場所であり、コレクションはさらに遠い存在かもしれません。そこで、私たちは保管庫から作品を持ち出し、南北に広がる大阪府の色々なまちをまわってきました。そして、目の前に現れた作品が自分たちが暮らす大阪にあること、知らない誰かの物ではなく、みんなの”宝物”であることを実感してもらうために、作品展示に加え、対話型鑑賞の手法を用いて鑑賞プログラムを行ってきました。

本冊子では、教育現場に飛び込み、試行錯誤を重ね更新してきたキャラバンの取り組みを紹介します。本冊子が美術コレクションと教育現場をつなぐサポートブックとなり、出張展示や鑑賞授業の可能性がひらかれ、様々な人の手によって継続・更新されていくこと、そして、次世代を担う子どもたちと「大阪府20世紀美術コレクション」のあいだに新たな関係性が生み出されていくことを願っています。

2022年3月

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]

※大阪府20世紀美術コレクション

国内外の20世紀後半に制作された美術作品を中心とした、約7900点におよぶ大阪府所蔵のコレクション。大きく分類すると、「現代版画コレクション」、戦後関西を拠点に活躍した現代美術作家の作品を中心に収集した「関西の現代作家コレクション」、1990年から2001年まで開催していた国際公募展 大阪トリエンナーレの受賞作品を中心とした「世界の現代美術」、1990年の国際花と緑の博覧会で展示された作品や、関西で活躍した写真家の作品からなる「現代写真コレクション」、1992年のセビリア万博で展示されたサイエンスアートや陶磁器、書、ポスターなどがある。

※対話型鑑賞

美術史等の知識だけに偏らず、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して作品を読み解いていく鑑賞方法。1991年ニューヨーク近代美術館(MoMA)でアートを通じて鑑賞者・学習者の「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」を育成する対話型の鑑賞教育プログラムが開発された。その後、ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ(Visual Thinking Strategies)として発展・確立され全世界に普及。日本では、2004年より京都芸術大学(旧京都造形芸術大学)アートプロデュース学科が、MoMAのプログラムを源流に「みる・考える・話す・聴く」の4つを基本とした対話型鑑賞プログラム「ACOP/エイコップ(Art Communication Project)」を始めるなど、様々な取り組みが行われている。近年では、美術館や学校だけでなく、人材育成や組織開発等のプログラムとして企業や行政、NPOや病院など多領域からのニーズも高まっている。

参加校募集、学校や美術品輸送会社との事前調整、作品の選定、鑑賞プログラムの企画、ナビゲーションの練習など、様々な準備を経て当日を迎えます。ここでは当日までの過程を一挙公開！



「鑑賞作品との付き合いはじめ」ナビゲーターとして鑑賞会の前に取り組むこと

鑑賞会当日に向けてナビゲーターは様々な準備を行います。ここでは6つのステップに分けて紹介します。このステップの前にあたる「作品選定」については、P13のコラムで詳しくとりあげています。

1) 候補作品をスタッフで鑑賞する

候補作品を絞り込んだら、まずはスタッフで鑑賞します。なるべく多角的に作品をみるために、3人以上で取り組みます。この時点ではナビゲーターや鑑賞者といった役割は抜きに、作品について思いつくまま言葉にすることがポイントです。

2) 作品決定!まずはひとりで鑑賞(画像でもOK)

自分の〈解釈〉と、それは作品のどこから考えたのかという〈事実〉を区別しながら鑑賞していきます。こうしておく、鑑賞者の解釈が独り歩きして、作品から対話や思考が遠ざかっていきそうな時に、この〈解釈〉は作品のどこ〈事実〉から考えたのだろうか?と、鑑賞者にもう一度作品をみるように促すことができます。

例 〈解釈〉知恵、新鮮、美味しそう
〈事実〉赤い、ツヤがある、りんご

3) 作品について調べる

作者の経歴や作風の変遷、素材・技法・制作年といった作品自体の情報、影響を受けた作家、作品が制作された時の社会情勢など、幅広い視点で情報を集めていきます。2)で整理した〈事実〉にこうした情報が加わることで、〈解釈〉を更に広げることができます。

4) 自分だけの対話マップをつくる

ここでは〈解釈〉と〈事実〉を明確に整理しながら、可能な解釈を広げていきます。メモを取って視覚化しながら鑑賞することがポイントです。

5) 模擬鑑賞会

複数の鑑賞者を交えて、さらに作品の鑑賞を深めていきます。家族や同僚、友人など、年齢や経験を問わず様々な人に協力をお願いしましょう。鑑賞者の数だけ発言が生まれます。新しい鑑賞者との対話は、新しい発見や解釈を獲得できる絶好の機会です。4)で作成したマップを更新したり、新しくつくることを忘れずに。作品を鑑賞した時に生まれる言葉や解釈をより体系的に整理していきましょう。この時、よく話題になるテーマや問いを分類することが、鑑賞を深めるナビゲーションへと繋がっていきます。

6) 鑑賞会にナビゲーターとして参加

音声や動画の記録をとり、終了後に振り返りましょう。新しく出てきた言葉や解釈を記録してマップを更新します。2)から6)までを繰り返すことで、より奥行きある鑑賞へと繋がっていきます。



(左)候補作品を鑑賞する様子。(右)発言の内容をメモに書いて貼り付けていく様子。鑑賞が終わる頃には作品画像が見えなくなることも。

「登場人物」



コーディネーター
場をつくる人。授業とプログラムの全体進行や、鑑賞者が作品と向き合い、安心して対話できる環境をつくるため、教員と連携・調整する。



ナビゲーター
作品と鑑賞者に伴走する人。指導をするのではなく、鑑賞者と共に作品について語り合い、鑑賞者の意見を引き出しながら対話を促進させる。



学芸員
美術作品を専門的に扱う人。主に作品選定・輸送の手配・作品の安全管理・展示を行う。鑑賞者から要望があった場合には作品解説も行う。



学校/教員
出張先の学校で受け入れ窓口となる人。安心安全に授業が行われるようコーディネーターと連携して、授業時間や展示場所の確保など諸調整を行う。



鑑賞者
美術作品をみる人。キャラバンでは主に、出張先の学校の子どもたちを指す。

5月

1) 参加校を募る

5月～7月頃に、教育委員会を経由して大阪府内の学校へ資料を送付し参加校を募集しました。ありがたいことに、いつも応募多数だったため、学校の所在地・学年・人数・要望などバランスを考え参加校を決定していました。



6月

2) 候補作品を選ぶ

鑑賞会に向けて準備を始めます。まずは学芸員とナビゲーターが相談しながら候補作品を絞り込みます。



※「作品選定」についてはP13コラムで紹介。



7月

3) 作品を読み込み、模擬鑑賞会に挑む

作品を決めたら、まずはひとりでじっくり鑑賞します。作品に関する調査も進めつつ、模擬鑑賞会にチャレンジ!



※ナビゲーターが事前に取り組むことについてはP5のコラムで紹介。



実施校決定

4) 授業の目標設定と台本作成

授業の進捗やねらいを確認し、鑑賞の到達目標を考えます。当日の動きを台本として落としこむことで、それぞれの役割を明確にし、言動やふるまいに見通しをたてていきます。



6) 学校と事前確認する

教室の広さ、照明や空調などの確認、作品の運搬ルート調べます(エレベーター、階段の確認を忘れずに!)。お借りする備品や当日までのスケジュールなど、下調べや確認・調整事項がたくさん。コーディネーターと教員が連携しながら進めます。



5) 作品を決める

作品を決める際のポイントは主に3つです。

- ① 今後の活用予定を確認
- ② コンディションチェック
 - ・サイズ、額装状態、素材、作品状態を確認し、輸送、展示できるか判断
 - ・作品と鑑賞者にとって安全な展示ができるか検討
- ③ 授業の目標に適した作品か検討

多様な作品を鑑賞してもらうために、素材、技法、サイズなど、バリエーションを持たせる。図工で取り組んだ技法やクラスの様子などを考慮した展示リストをつくり、担当教員にも確認し決定。



8月

7) 事前説明会をする

全ての参加校合同で開催。①自己紹介②自由鑑賞タイム③対話型鑑賞の体験④プログラムの説明 学校・先生の問題意識やどのような授業、体験にしたいかをお聞きます。enocoと学校、双方の思いを伝え合う機会です。

コレクション展と鑑賞会に合わせて実施し、初めての対話型鑑賞を体験してもらいました。この機会がきっかけとなり、教員同士のネットワークづくりや、enocoとの共同研究の動きにつながっていくことに。



9月

8) 美術品輸送会社の手配と調整

日程調整、運搬ルートの相談、作品情報の提供を行い、車両と作業人員を決定します。作品の輸送・展示に関する保険加入は輸送会社に手配してもらいます。

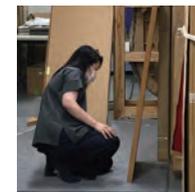


3④6をくり返す

10月

9) 前日準備

輸送時の作品保護の準備、運び出しがスムーズになるように準備するものをまとめておきます。翌日の天気予報もチェック!雨天の可能性がある場合は十分に対策を。参加スタッフへ連絡、情報共有も忘れずに。



※準備するもの詳細はP10参照



しっかり準備したら、あとは当日を迎えるのみ！
出張先の学校では注意すべきことがたくさん。
臨機応変に対応しながらプログラムを進めていきます。
ここでは、とある日の流れを紹介します。

登場人物



作品をみるための
「3つのコツ」

鑑賞を始める前に「鑑賞を、みんなにとってより良い時間にするために3つのコツをおしえます！」と呼びかけて、パネルを出しながら説明しています。

① すみずみまでよくみる(みる)
「近づいてみたり、少し離れてみたり。もうみていないところはないぞ!というくらい、いろんな角度から隅々までみてください。」

ひと目みてわかった気になると、もっとみようと思うのはなかなか難しいことです。みのがしているところはないか?と意識付けします。

② 作品をみて気づいたこと、感じたこと、考えたことを話す(かんがえる・はなす)

「隅々までみたら、いろんなものがみえてくると思います。こんなものをみつけた、こんなふう思った、これは何だろう?ということをぜひ言葉にしてみてください。」

自分の考えや気づきを全員でシェアします。何から話しはじめたらよいのかな?と迷う子どもたちには「気づいたこと(事実)」「感じたことや考えたこと(解釈)」から話しはじめてもらうこともありました。

③ 他のひとの意見も受けとめてみる(きく)
「同じ作品をみても、他の人は自分とは別のものにみえていたり、違う感じ方をしていることもあります。答えはひとつではありません。そんなみかたや感じ方もあるんだな?!と受けとめてみよう。」

同じ作品をみても、鑑賞者によって「みえている世界」は違います。それぞれの解釈や意見をひとまず受けとめる。自分以外の人の視点を共有することで、世界が広がる面白さを体験してもらいたいと考えています。



8:30 積み込み、出発
30分

作品と備品を輸送車に積み込みます。作品に何かあった場合にすぐに対応できるように学芸員も同乗します。



9:30 到着、運び込み開始
30分

上履きと軍手は必須! 学校はエレベーターがないこともあります。来客用スリッパで歩くと、搬入中に滑って転倒する可能性があります。作品とスタッフ自身の安全確保のために事前準備が必要です。



10:00 挨拶
じっくり

職員室に挨拶に行きます。学校によっては校長先生にお会いすることもあります。学校に事業趣旨や実績をお伝えする貴重な機会なので、設営スタッフと二手に分かれて丁寧な対応を心がけました。



終わり次第合流

10:40 授業開始
スタート

整列と挨拶は先生にお任せします。enocoスタッフにとっては、表情や挨拶などから、緊張具合やクラスの雰囲気、様子を知る機会です。



10:30 直前ミーティング
10分

参加人数や見学者など当日の状況を確認し、全員で台本をみながら授業の流れ、役割分担、スタッフの立ち位置や動きの最終調整をします。



よそ者であるenocoスタッフが来ることで、子どもたちを不安にさせないように気を配ります。「タイムスケジュールを書き出す」「スタッフに名札をつける」「名札にはニックネームを書く」「指し棒をつくる」など、安心安全な場にするためには、ちょっとした工夫が大事だったりします。



10:00 会場の準備
30分

作品の開梱・展示、記録撮影用ビデオカメラ、時計、説明パネル、指し棒などの小道具を用意しておきます。



学校の教室は、展示室とは異なるため、作品と鑑賞者どちらにも適した環境に整える必要がありました。例えば、鑑賞者が作品に触れたり転倒しないように十分にスペースを空けて展示パネルを設置したり、作品保護の観点から直射日光が作品に当たらないように注意しました。学芸員も確認しながら、安心安全に過ごせるような場づくりを心がけています。



10:40 自己紹介、プログラム説明
5分

enocoとスタッフの自己紹介、プログラムと気をつけて欲しいことの説明をします。質問を投げかけたり、やりとりをする中で、この場は思ったことや考えたことを、どんどん話してもいいんだ!と理解してもらえるようにしています。



10:45 自由鑑賞
5分

全ての展示作品を自由に鑑賞する時間をつくります。この時、作品解説はしません。



子どもたち同士のおしゃべりに聞き耳をたて、時には参加し、後で発言するよう促したりと、鑑賞の場に慣れるための大事な時間です。スタッフの心がけを一部ご紹介します。

- ・1作品につきひとりスタッフが見守る。
- ・「作品に触れない」ことは注意ではなく「お願い」として伝える。
- ・ひとりである子には声をかけて話し相手になる。スタッフが気にかけていることを伝える。
- ・ナビゲイターが定期的に全体へ声がけて、全作品を鑑賞するように促す。



10:50 対話型鑑賞 導入 / 1作品目
10分

鑑賞作品の前に集合。作品をぐるりと囲みます。座っても立ってもOK。続いて、作品をみる「3つのコツ」を説明します。

- ① すみずみまでよくみる
- ② 作品をみて気づいたこと、感じたこと、考えたことを話す
- ③ 他のひとの意見も受けとめてみる

最初の作品は、立ったりしゃがんだり、上下左右に移動して視点を変えて「すみずみまでよくみる」ことを体で覚えるために立体作品を選びました。



サポートにまわるスタッフは、できるだけ多くの発言を拾うことができるように、前後左右に分かれ子どもたちと一緒に座ります。視線を合わせることで、発言を待つ時間のフォローや、みること、考えることへと誘う役割を担います。ただし、個々が会話に集中してしまうと、全体の話題がわからなくなるのでバランスが大事です。



次ページから、対話型鑑賞の始まりです!

11:00 10分 対話型鑑賞 / 2作品目

まずは、はっきりした線や色使い、わかりやすいモチーフなどが描かれている平面作品や版画、写真作品を鑑賞します。作品の中に描かれていることや発見したことを、具体的に言葉にしやすい作品から鑑賞することで、作品の中につづいたこと(事実)を話すことに慣れていきます。



11:10 10分 対話型鑑賞 / 3作品目

続いて、抽象度が高い、何が描かれているか鑑賞者によって解釈が分かれるような作品を鑑賞していきます。作品の中から気づいた(事実)を元に、読み取った物語(解釈)を他者と共有し、そこからさらに考えられることは何か?を考え、作品の解釈を深めていくことを目指します。



抽象的な作品であればあるほど、作品とは離れた妄想話で盛り上がることもあります。その時は、話の根拠(事実)を作品の中に探すよう促します。視点や話の軌道修正こそナビゲーターの腕の見せ所です!



11:20 5分 ふりかえり

全ての鑑賞を通して、みんなで気づいたこと、考えたことを振り返ります。



この時に学芸員から、作品情報や関連情報を知らせることもあります。例えば、鑑賞した作家の作品が展示されている場所の案内や技法など、関心があれば作品に関する情報や知識を伝えています。



4時間目の授業



展示 + 鑑賞 + α

組み合わせると、もっとみたくなる?!

「作品との豊かな関係性を築くためには、対話や言葉だけでは足りないのかもしれない」という考えから、対話型鑑賞と造形を組み合わせたプログラムにも取り組みました。例えば、鑑賞した作品の中からお気に入りの1点を選んで模写してもらったり、作品の中に描かれているモチーフを、粘土や色鉛筆など使い慣れた画材を使って制作してもらいました。

造形活動に取り組む中では、題材の作品を何度も見返します。すると、全部みたくもりだったけれど見逃していた作品の細かな部分や、気づいていなかった部分の発見に繋がっていきます。手を動かしていくうちに自然と、作品の大きさや重さ、工程に気づいたり、「まっすぐ線を描くのは大変だ!」と作者と同じ目線に立った苦勞を味わったりと、次々と新しい発見が生まれていきます。そしてその発見を子どもたち同士で嬉しそうに話している姿がとても印象に残っています。



13:00 20分 昼休みの自由鑑賞

対話型鑑賞を体験できなかった子どもたちも作品を鑑賞する機会を作りたい!という要望から、昼休み時間に会場を解放しています。他のクラスの先生やPTAなど、授業では出会わなかった人たちとも鑑賞することができました。



5時間目の授業、6時間目の授業

15:30 30分 片付け

美術品輸送業者とスタッフで、作品の撤去・梱包、機材の片付け、運搬を行います。



16:00 10分 挨拶、学校出発

感想や今後の課題・要望のヒアリングを兼ねて、職員室へ挨拶に行きます。「普段は発言しない生徒が発言していた!」「自然に議論が起きていた」など、普段とは違った子どもたちの様子に驚いたという感想、継続や共同研究のお誘い、授業後の評価方法についての相談といった、様々な声を聞くことができました。



12:15 45分 給食を一緒に食べよう!



教室にお邪魔して給食をいただきます。授業中に聞くことのできなかった意見や感想をたくさん聞くことができます。子どもたちにとっても、発言できなかった物足りなさや疑問を解消する時間となるようで、いつも時間いっぱいおしゃべりします。



16:10 30分 移動・反省会



振り返りは必須! 帰路につく移動時間を有効活用し、気づきや課題を共有します。次回のキャラバンに向けて、より良いナビゲーションの方法を検討したり、見聞きた子どもたちと先生の発言や反応を共有し分析しながら、プログラムや台本を更新していきます。



16:40 到着、片付け、解散



後日 アンケートの依頼

学校で授業後にワークシートや感想シートを書いている場合は、enocoスタッフにも見せていただきたいと思います。お願いしています。教員の方々へのアンケート協力の依頼も忘れずに。



コラム

「3つの作品を鑑賞する」ことで、子どもたちに伴走する

私たちは「対話型鑑賞」の手法を参考に、独自の鑑賞プログラムを作ってきました。中でも、小学校での「1コマ45分」「3つの作品を鑑賞する」というスタイルは、これまで様々な試行錯誤を重ねながらつくったものです。

一般的な対話型鑑賞では、1作品につき20~30分、長いものでは1時間以上かけて鑑賞することが多いようです。それと比較すると、鑑賞時間が「1作品10分」とは短く思えるかもしれませんが、そもそも美術作品の鑑賞経験がない、ましてや対話型鑑賞は初体験という状況の中では、まずは慣れることからスタートします。

3作品の鑑賞には、段階的に「めあて(目的/目標)」を設定していました。まず、導入として心と身体の緊張をほぐす1作品目。続いて、ワクワクした気持ちで作品鑑賞に向き合いはじめる2作品目。そして、ぐっと集中して鑑賞に入り込む3作品目。こうして段階を踏むごとに鑑賞のコツをつかみ、作品を知り尽くしている私たちですら気づけなかった発見や、作品の核心に迫っていく子どもたちの様子にいつも驚かされました。

私たちがナビゲーションする中で、大切にしていたことは、子どもたちの様子や気分の変化、鑑賞が深まった時に感じる驚きや戸惑いも注意深く観察しながら、作品鑑賞を進めていくことでした。そのため、子どもたちの様子次第では、鑑賞を切り上げたり延ばすことを、柔軟に判断する必要があります。あらかじめ用意した段取りにこだわりすぎず、子どもたちに伴走することが、ナビゲーターの心得として大切なことだと考えています。



《対面の場合》

作品を保管庫から持ち出し、保管庫に戻すまで、様々な事態を想定しながら備品を用意します。ここではこれまでの取り組みの中で必要だった備品を紹介します。

作品の展示に関わるもの

- 作品
- 作品リスト
- 輸送箱
- 作品を仮置きするあて布団／エアキャップ
- ニトリル(ビニール手袋)／白手袋
- ウェス／コロコート(静電気防止剤)※額とアクリルを掃除する
- テープ類(マスキングテープ、ガムテープ、養生テープ)
- 立体作品展示用: 白布、アクリル板※学校の机において使用
- 大型作品展示用: 台(木箱など)
- 平面作品展示用: 展示パネル、組立金具

作品鑑賞プログラムに関わるもの

- 「3つのコツ」説明パネル
(鑑賞の「3つのコツ」を、1つずつパネルにしたもの)
- ビデオカメラ(動画記録用)／三脚
- カメラ(静止画記録用)
- iPad(タイマーとして使う)
- 指し棒
- 養生テープ／マジック(名札用)
- 台本／バインダー



※展示パネルはクリエイターに制作を依頼しました。平面作品を1〜3点ほど展示できるサイズのパネルと脚は1人でも持ち運びできるサイズに分割できます。組立は3人で行います。
(デザイン/制作: 合同会社アトリエカフェ)



「作品を触ってはいけません」

先生が授業のはじめに、子どもたちにこう注意する場面に何度か遭遇しました。その瞬間、子どもたちの心と身体は緊張し、ぎゅっとかたくなることでしょう。もちろん、私たちも事前に先生とのやりとりの中で、作品には触れないようお願いをしています。それは作品に触れることによって、作品が落下して破損したり、子どもたちが怪我をする可能性があるからです。

この事業は、作品と鑑賞者のより良い関係づくりを目指し、子どもたちに大阪府20世紀美術コレクションを「わたしたち

のコレクションだ」と思ってもらうために始めたものです。学校という日常空間で、リラックスした状態で集中して作品を鑑賞することで、作品を「新しい友達」のように思ってもらえることを願って実施しています。

「作品に触らないこと」は、あくまでも「新しい友達」である作品と仲良くなる方法のひとつであり、触れてはいけない「何か／誰か」として遠ざけることではありません。作品と子どもたちの安全を守りつつ、作品との出会いの場をどうつくっていくか。子どもたちのことをよく知る先生と、作品のことをよく知る私たちで、これからも共に考えていきたいと思ひます。

《オンラインの場合》

2020年からはオンラインの対話型鑑賞にも取り組んでいます。実物の作品をカメラで映し出し、ナビゲーターのナビゲーションと共に子どもたちが作品をより良く鑑賞できる環境づくりを目指しました。どのような機材と配信システムが良いのだろう...できれば誰もがセッティングできる簡単な仕組みが良いなあ...と、試行錯誤しています。ここではそんなenoco的オンライン対話型鑑賞のための機材をご紹介します。



鑑賞者の表情を確認するナビゲーター用モニター

ビデオカメラ

ナビゲーター用ワイヤレスマイク(WIRELESS GO II)

ナビゲーター用スピーカー

鑑賞者の音と表情を確認するモニター用パソコン

配信用パソコン

モニター用ヘッドホン

ワイヤレスマイク受信機(WIRELESS GO II)

配信用ビデオスイッチャー(ATEM Mini)

※安定した配信のためにインターネットは有線での接続を推奨します。
※画像の配線には電源アダプターは含まれていません。

展示、鑑賞した 作品の紹介



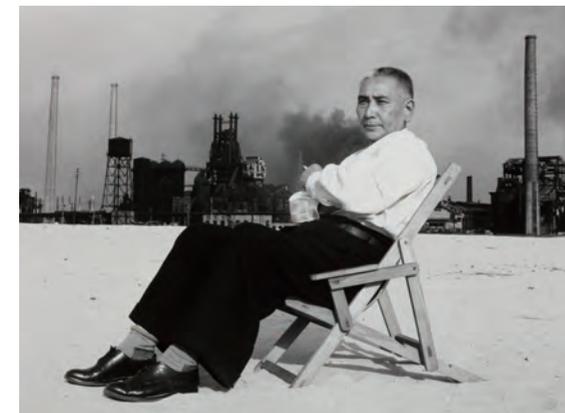
1



2



3



4



5



6



7



8

1
齋藤 眞成
(さいとう しんじょう / 1917-2019)
《二人》
油彩、キャンパス
65.2×90.9cm
1985年
#バンチ #泣いている #喧嘩
#仮装パーティー #マグマ #感情
#抽象 #凸凹 #油彩

2
吉原 英雄
(よしはら ひでお / 1931-2007)
《彼女は空に》
リトグラフ、エッチング、
アクアチント、紙
72.0×104.0cm 1968年

#ビーム #ヘソ出し #服装
#ポーズ #放出 #気持ち良い
#抽象 #版画

3
田中 一光
(たなか いっこう / 1930-2002)
《Nihon Buyo UCLA》
オフセット、紙
103.1×72.9cm 1981年
© Ikko Tanaka / licensed by DNPartcom

#顔 #髭 #目と頬 #緊張している
#化粧 #和装 #日本文化 #英語
#○△□ #象徴 #ポスター

4
岩宮 武二
(いのみや たけじ / 1920-1989)
《社長復帰》
ゼラチン・シルバー・プリント
29.6cm×39.9cm
1947年

#工場 #スーツ #老人 #偉い #砂浜
#椅子に座って #休憩 #悩み
#人物像 #モノクロ写真

5
前田 藤四郎
(まえだ どうしろう / 1904-1990)
《美女と野獣》
リノカット、紙
28.0×46.0cm
1930年
#身体がない #血管 #おぼけ
#男女 #キラキラ #目線
#片思い #二人の関係 #版画

6
田島 直樹
(たじま なおき / 1968-)
《メンテナンス》
エッチング、アクアチント、
油性インク、手漉き紙
80.0×150.0cm 1996年
#クレーン #男性 #頭あるなし問題
#工事現場 #途中 #等身大
#大人数 #モノクロ #版画

7
清水 九兵衛
(きよみず きゅうべえ / 1922-2006)
《MASK-81》
アルミニウム、塗料
14.5×60.0×11.0cm
1988年
#滑り台 #ハイヒール #赤い
#ザラザラ #浮いている #重さ
#鉄 #冷たい #素材感 #立体

8
森口 宏一
(もりぐち ひろかず / 1930-2011)
《Nay》
ハンダ線
12.0×12.0×12.0cm
1974年
#ラーメン #鉄 #硬い
#ぐにやぐにや #柔らかいかも
#密度 #予想より重い #立体

凡例
作家名
《作品名》
技法・材質 サイズ 制作年
#enoco的キーワード

その他、enoco コレクション・キャラバン事業で展示/鑑賞した作品
浅野竹二《赤いマント》/《新大阪風景 大阪城雨後》/版画、高島彦志《大阪・風の記憶(2)》/絵画(二曲屏風)、前田藤四郎《冬の湖》/版画、木村利三郎《WASHINGTON SQ FANTASTIC》/版画、篠原猛史《THE WALL + THE CLOUD 93%》/版画、上前智祐《立体(黄)》/立体、ジェリー・ユルスマン《浮遊する木、さやえんどう》/写真、マーク・ハンブソン《ジャック・ケチャップ》/版画、清水六兵衛《赤絵花陶器》/立体(花器)、徳田八十吉《彩釉杯》/立体(花器)、岩宮武二《療友たち》/写真ほか 全31作品



「対話型鑑賞に適した作品」ってなんだろう？

「鑑賞する作品はどう選んだらよいのでしょうか？」

これからナビゲイターとして対話型鑑賞に取り組んでみようという方から、こう尋ねられた時、いつも困ってしまいます。何に困るかという、私たちが作品を選ぶ時は、鑑賞会の目的、鑑賞者の年齢や鑑賞するタイミング(例えば学校の授業で取り組んでいる技法や題材とリンクしやすい作品)、会場の状況や条件、作品の状態や貸出状況など、様々な要素を複合的に判断しているため、とても一言では答えられないのです。でも、それらをすべて棚上げして、質問にお答えするなら...「選んだ作品と自分が、長くお付き合いできるかどうか」かもしれません。

鑑賞会では1作品につき数十分、対話を重ねます。準備段階からナビゲイターは数時間、時には何日もかけて作品と向かい合います。好みだけで選んでしまうと飽きがくるのも早いもの。その作品からはたくさんの「なぜ？」が湧いてくるだろうか。その「なぜ？」について、様々な角度/視点からみなおしたり調べたり、その作品について考え問い続け、長くお付き合いをすることができるだろうか?と一度考えてみることをおすすめします。

これまでのキャラバン

実施年度	2016年～2021年度 ※なお、2020～2021年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で公募を停止し、過去の実施校での実践やオンライン鑑賞会を進めてきました。
対象	大阪府内の小学校・中学校・高等学校、支援学校（一部、幼稚園）
実施方法	毎年度、教育委員会等を経由して公募を行い、応募校の中から地域や年齢、人数等のバランスを考慮し、5校を選定します。
実施内容	出張展示と鑑賞プログラムを組み合わせた授業を行います。基本は1クラスごとに1～2コマ。鑑賞プログラムは「対話型鑑賞」を軸に組み立てます。作品に付随する情報の提供や作品解説を主とせず、作品そのものをじっくり鑑賞し、作品から受け取った印象や情報を言語化し、他者と共有することによって、作品や美術に対するみかたや感じ方を広げる／深めることを目標としています。
実施総数	9市2町1村、27校（うち3校は複数回実施）、のべ1882人の児童・生徒が参加

他の事業や活動への展開

キャラバンで蓄積した経験とノウハウを活かし、コレクション展の企画や、学校との連携事業も実施しました。



「enocoおしゃべり美術館」展（2018-2020）

会場内での”おしゃべり”やコミュニケーションを通して、美術作品に親しむ機会をつくることをコンセプトとしたコレクション展。会場内での対話・会話を歓迎し、大人から子どもまで幅広い世代が参加できる対話型鑑賞会も開催しました。また、模写キットや鑑賞シートなど鑑賞の手助けとなるツールを充実させ、描かれた模写やシートを会場内でも掲示しました。それらをきっかけに会話が始めたり、他者の視点や発見を知り改めて作品を鑑賞する姿が見られるなど、同じ時間と場を共有しなくても、鑑賞者同士のつながりや関わり合いが生まれていました。

#コレクション展 #対話型鑑賞 #おしゃべり推奨 #鑑賞会 #模写



学校との連携（2020-）

2019年度にキャラバンを実施したことがきっかけとなり、翌年度から大阪教育大学附属特別支援学校との連携授業を行っています。2021年度からは、担当教員による実践研究にも共同研究者として参加しています。オンライン鑑賞会を定期的の実施し、子どもたちの作品鑑賞の様子の変化を観察するなどを行っています。

#特別支援教育 #同じメンバー #定期的 #オンライン授業 #美術鑑賞学習

#学校連携 #実践研究 #観点別学習評価

事業協力：大阪教育大学附属特別支援学校 花田 知恵先生



実践者のサポート（2021-）

鑑賞プログラムを始めようとしている人、すでに取り組んでいる人が、様々な課題/議題を持ち寄り、情報共有や意見交換をする研究会の立ち上げ、研究者が幼稚園で行う鑑賞授業に作品を貸し出すなど、実践者へのサポートも行っています。

#教員 #ネットワーク #情報交換 #オンライン #悩みは似ている #コレクション貸出

あとがき

「この作品、座って下からみたら浮いてみえるやん」「え？どこどこ!?!」「ほんまや!」
大阪府20世紀美術コレクションをみて、そんなふうには話す子どもたちがいる風景をもっとつくりたい。そんな思いと共に学校へと出かけたこの6年間で、たくさん子どもたちとコレクションが出会い、対話する場に立ち会うことができました。

昨今、デジタルアーカイブやバーチャル空間での展示など、作品へのアクセス方法の選択肢が増え、デジタルデータによる作品展開など、「本物」の作品のあり方も多様になっています。そんな中、私たちは実際に目の前にある「実物」としての作品を子どもたちと共にみることに取り組んできました（コロナ禍で直近の2年間はそれが叶いませんでしたが...）。教室に現れた作品との距離を測りながら、次第に目と身体でもって近づいていく子どもたち。遠くから眺めていたり、近づいたと思ったら「なんか変」「〇〇に似てる」「これほんまに本物なん？いくらするん？」とニヤッとしたり、興味を持ってずぶずぶしてしまったりと、反応は様々です。「どうみるのが正解なん？」と戸惑う子どもたちの隣に座り、視線を合わせ、作品を囲んで話をするうちに「作品と子どもたちの目が合ってきたな」と感じとれる瞬間がやってきます。そこを見計らい「次の作品もみてみよう」と促すと、「もう？あとちょっとだけみたい!」という反応が返ってくる場合があります。コレクションと子どもたちの関わり合いがはじまった、という手応えを感じる瞬間です。

ですが一方で、この手応えを評価につなげる難しさがあります。コレクションの管理・活用を担う私たちには、より多くの方に作品をみていただくという使命があります。そのために作品活用「点数」という数値目標があり、その達成度合いによってひとつの評価がなされます。しかし現状は、教室に展示したひとつの作品と30人の子どもたちが出会い、それぞれの中で考えや発見が生まれたとしても、活用点数は「1点」です。この体験や時間の質、関わった人々の人数、いうならば「作品関係人口」といった観点からの評価も考えられるのではないのでしょうか。

この記録集をつくるために、私たちも改めて、それぞれの記憶や思いを開示し対話を重ねました。その中で気づいたのは、キャラバンはひとりでは成立しないということでした。対話型鑑賞は他者とともに対話を積み重ねることにより、多様な視点がひらかれ、さらに作品をみて考えることができます。キャラバンもまさに対話型鑑賞そのもので、関わったすべての人たちとの対話を通じて、私たち自身も、コレクションとどう関わり合い、活かすことができるのだろうか？と問い続けることができました。ここでは試行錯誤のほんの一部しか紹介できませんでしたが、私たちが蓄積した経験やノウハウをひらくことで、教育や文化芸術の現場で対話を重ねる人々の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、「enoco コレクション・キャラバン」事業に参加いただきました、子どもたち、学校関係者のみなさま、作品を生み出し鑑賞する機会を与えてくれた作家のみなさま、美術品輸送会社のみなさま、スタッフ、本冊子の制作に協力くださったみなさまに、心より感謝を申し上げます。

2022年3月

スタッフ

高坂 玲子

enocoチーフディレクター。enocoの事業の現場を統括している。本事業の立ち上げ・素案作成を行った。鑑賞会ではナビゲーターも務めた。

高橋 真理子

学芸員/enocoアートコーディネーター。コレクション活用業務と教育事業を担う。本事業担当。学芸員として作品の管理/保全を監督し、ナビゲーターも務めた。

古谷 晃一郎

enocoプログラムディレクター。社会人対象の教育事業やフォーラム等を担当。本事業ではコーディネーターを務め、オンライン鑑賞会では機材システム構築と配信オペレーターを務めた。

吉原 和音

enocoアートコーディネーター。アーティストサポート事業やマルシェ、情報誌の編集など社会とアートを繋ぐ事業を担当。本事業では鑑賞プログラムの設計とナビゲーターを務めた。

これまで参加したスタッフ、関係者

近藤 美智子(enocoアートコーディネーター/広報)、松本 拓(enocoプログラムディレクター)、石川 英樹(enoco担当マネージャー)、その他、インターンシップの学生や、参与観察者として京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター(ACC)にもご協力いただきました。